様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月　 ９ 日現在

機関番号：３２６８５
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2015～2019
課題番号：１５Ｈ０３１８３

研究課題名（和文）伊勢商人の文化的ネットワークの研究――石水博物館所蔵書簡資料をもとに

研究課題名（英文）Cultural Networks of Ise Merchants in Early Modern Japan: Research on the Letters of Sekisui Museum Collection.

研究代表者
青山　英正（AOYAMA, Hidemasa）

明星大学・人文学部・教授

研究者番号：１０５１３８１４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　7,600,000円

研究成果の概要（和文）：　三重県津市にある石水博物館には、近世の伊勢商人を代表する木綿問屋であった川喜田家伝来の歴史資料等が数万点残されている。本研究では、そのうち、代々の当主に宛てられた書簡約4600点の新たな目録を作成し、併せて画像データ化と重要書簡の解読・翻刻をおこない、書簡を通じた彼らのネットワークについて検討した。
　その結果、川喜田家の歴代当主が、学問・好古・神職・文芸・書画・本草学・茶・工芸・蔵書家など多分野にわたる人々と幅広く情報交換をおこない、彼らのネットワークは社会階層のみならず、伊勢という地域をも越えて、江戸・京都・大坂の三都に及ぶ広範囲なものであったことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　川喜田家のような伊勢商人たちは、伊勢を拠点としつつ、江戸・京都・大坂の三都とも文化的、商業的関係を保つことで、広域で多分野にわたる人脈を築き上げた。近世日本における最も豊かな地域の一つであった伊勢における、こうした文化的ネットワークの構築は、やがて情報と書物の流通や蓄積を伊勢の地にもたらし、近世中期以降、本居宣長のような文献学的手法を用いた学者や、小津桂窓・竹川竹斎といった大蔵書家を育んだと考えられる。従来、近世の文学や文化は三都中心に考えられてきたが、伊勢の文化的ネットワークを具体的に解明した本研究の知見は、地方という新たな視座からそれらを捉え直す大きな契機となるはずである。

研究成果の概要（英文）：　Sekisui Museum in Tsu, Mie, has tens of thousands of the historical resources handed down from the Kawakita family, who were one of the richest cotton merchants from Ise (present-day, Mie) in early modern Japan. Our project has been to build up a digital epistolary archive of about 4600 letters of the Kawakitas, then to publish a new catalogue and to examine them in detail to understand the networks of Ise merchants.
　Our 5 years project uncovered in result that the Kawakitas had wide-ranging correspondence and shared interests in various kinds of knowledge with people: classical scholars, philologists, antiquaries, Shinto priest, poets, artists, botanists, experts in the tea ceremony, craftsmen and bibliophiles. Their networks have spread across not only social boundaries but geographical borders.
　Ise wasn't large city but was one of the richest and the geographically central region of Japan. Our findings can contribute to illuminate the unknown aspects of early modern Japan

研究分野：日本近世文学・日本近代文学

キーワード：近世文学　伊勢商人　書簡　書物文化　ネットワーク

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

公益財団法人石水博物館は、16 代川喜田久太夫（半泥子）が昭和 5 年（1930）に設立した財団法人石水会館を母体としている。平成 22 年（2010）に法人名を公益財団法人石水博物館に変更し、千歳山（津市垂水）に新しい展示施設を新築して、平成 23 年（2011）に現在地に移転、開館した。

同館の所蔵品は、近世の豪商川喜田家の旧蔵資料を中心としている。所蔵品は、陶芸家としても知られる半泥子の作品のほか、茶道具、日本画、洋画、古書典籍、錦絵、伊勢商人関係歴史資料など多岐にわたる。同博物館の敷地内には、昭和 5 年（1930）に半泥子が所蔵品の収蔵庫として建設した鉄筋コンクリート造 4 階建ての千歳文庫があり、上記の同館所蔵品はそこに収められている。

このうち歴史資料については、平成 7 年～9 年（1995-1997）に、津市教育委員会が、文化庁および三重県の補助金を受けて古文書･蔵書等の大規模な調査をおこない、平成 10 年（1998）3 月に『川喜田家歴史資料目録』（以下、『歴史資料目録』）、『川喜田家歴史資料目録書状一覧』（以下、『書状一覧』）を刊行した。

川喜田家に伝わる資料の多くは、『歴史資料目録』第一部「解説」によれば、14 代川喜田久太夫政明（石水）によって整理されたという。また、半泥子の時代に分類・整理がおこなわれ、この際にいくつかの史料括りや箱が成立した。その後、アジア・太平洋戦争時と敗戦後の日本軍関係者・占領軍による接収や、昭和 40 年代以降に何度か実施された大規模調査等があったため、川喜田家所蔵資料の原状は、千歳文庫への搬入以来、次第に崩されてきているとのことである。

書状類に関しては、『書状一覧』に日付・差出人・宛先を掲載したとはいえ、津市教育委員会による調査では、全ての内容の確認にまで至らなかった。もっとも、調査委員の一人であった高倉一紀氏は、『歴史資料目録』第一部「解説」の中で、すでにその着目していた。

しかしその後、『三雲町史』第 3 巻（資料編 2）(2000 年)に同館所蔵松浦武四郎書簡が翻刻されるなど、一部の翻刻・紹介がなされたほかは、4000 通を超えるその「浩瀚な資料群」の全体像は明らかにされないままであった。

如上の研究状況を踏まえ、平成 26 年（2014）7 月からの予備調査を経て、翌平成 27 年（2015）4 月から、青山を代表者として科学研究費補助金（基盤（B））の助成を受けてスタートしたのが、本研究「伊勢商人の文化的ネットワークの研究――石水博物館所蔵書簡資料をもとに」（以下、本研究）である。

２．研究の目的

本研究の目的は、石水博物館所蔵の書簡資料を後世まで活用できるように整備した上で、実際に自らもそれらを用いて、川喜田家と江戸・京都・大坂・伊勢など各地の文壇や書肆等との文化的ネットワークの実態を解明し、伊勢商人の文化活動、ひいては伊勢商人が近世文学および文化に果たした役割を、具体的に明らかにすることにある。

３．研究の方法

本研究が対象とした書簡資料は、基本的に『書状一覧』に掲載されたものである。ただし、調査の過程で新たに見つかったものをそこに加え、その一方で、同じ時期に別のグループが調査していた長井家関係書簡は、調査の混乱を避けるために原則として調査対象から外した（川喜田家宛て書簡に混ざっていたものなどは一部採録）。結果的に総数は、約 4600 点である（断簡や断ち切られて屏風等に貼られたもの、あるいは巻物に装幀されたり冊子の形に綴じられたりしたものなど、形態が様々であるため、概数で示しておく）。

調査対象には、1 点ずつ整理番号を付した。『書状一覧』に掲載されたものについては、原則としてその整理番号に従った。『書状一覧』未掲載のものについては新たに番号を付け、また整理番号が重複するなどの不備が見られたものについては、新たな枝番号を付けたり、整理番号を訂正したりするなどした。整理番号が必ずしも連続していないのは、これらが平成 7 年～9 年（1995-1997）の津市教育委員会による調査時に古文書と併せて付番され、『書状一覧』はそこから書状のみを抜粋した目録だったからである。

本研究では、以上の対象について、（１）目録作成、（２）撮影、（３）整理、（４）翻刻および応用研究をおこなった。

（１）目録作成

汎用性の高いマイクロソフト社のエクセルファイルで作成し、『書状一覧』の誤記は適宜修正した。また、人名の抽出等の操作を容易にすべく、差出人名には適宜補足情報を加えた上、本研究成果報告書掲載のものと同じデータを附録 CD-ROM に収録した。

配列については、『書状一覧』が差出人順であることを踏まえ、このたびの目録は整理番号順とした。それによって、箱のかたまりの意味がある程度浮かび上がってこよう。加えて、巻末に人名索引を付した。

（２）撮影

オーバーヘッド型の非接触型スキャナー富士通 ScanSnap SV600２台を用いた。このスキャナ

ーは非接触型であるため資料を傷めるおそれが少ない。またカメラと異なりそれ自体が LED 光源を持つため、外光の影響や画像のムラが抑えられるだけでなく、広範囲にピントが合い、拡大しても文字が鮮明に読み取れるという利点がある。作業者が代わっても均質な画像データを得ることができ、PDF ファイルとして１点の書簡は１つのファイルとして保存されるので、データ管理も容易である。書簡に付いた折り癖も、専用の透明アクリルボードによってほぼ解消することができる。専門業者の撮影技術には及ばないものの、画面上で書簡の文字を読めるようにする、という目的は十分に果たせるはずである。

スキャナーの設定は、画質＝エクセレント（600dpi）、カラーモード＝カラー、読み取り面＝片面読み取り、原稿の向きの自動回転＝オフ、継続読み取り＝有効、「スキャン」ボタンを押してから、読み取りを開始するまでの待ち時間＝2 秒、その他画質に関するオプション＝すべてオフ、ファイル形式＝PDF、読み取る原稿＝平らな原稿、原稿サイズ＝A3、圧縮率＝3（標準）とした。

（３）整理

整理番号「Ⅱ＋アルファベット」およびⅢの箱の書簡については、１点ごとに中性紙（A4 版コピー用紙）を三つ折りにしてくるみ、整理番号順に中性紙保存箱に収めた。中性紙保存箱は、人間文化研究機構国文学研究資料館から石水博物館が提供を受けたものを使用した。

それまで書簡を括っていた紐を解き、１点１点を新たな箱に移し替えるという作業は、言うまでもなく原状を崩す行為である。しかし、本研究では以下の点に鑑み、博物館側とも打ち合わせをした上で、書簡資料の整理に踏み切った。

まず、先述の通り、同博物館歴史資料には何度か調査が入り、またその後個別の閲覧申請に対応してきた結果、原状はすでに繰り返し崩されてきている。その一方で、津市教育委員会による調査時に、括りの情報はデータ上残されており、たとえ今回新たに整理し直したとしても、津市教育委員会の調査時点における保存状態は仮想的に復元可能である。

これに加えて、資料の保存と活用という観点からも、新たな整理を施すことが必要だと考えた。段ボール箱の中に、100 点近くの書簡が紐で括られ、その束が複数積み重なっている状態は、資料への負担が大きいことは間違いない。1 点ずつ中性紙で保護し、それをさらに中性紙保存箱に収めることで、資料の保存状態は格段に上がることが期待できる。

また、書簡はその形態から整理・保管・出納が容易でなく、そのためこれまで十分に活用されてこなかった。書簡を用いた研究にとって、できるだけ多くの関連書簡や関連資料を読み込むことは、解読の精度の向上や当該書簡の意義づけのために必須である。書簡資料を画像データ化して内容確認を容易にすることと合わせ、必要に応じて比較的短時間で出納できる状態にしておくことは、資料の活用という点から見ても有意義であると考えられる。

（４）書簡資料の翻刻および応用研究

研究期間中に、以下の翻刻をおこなった。翻刻資料の選択はメンバーの関心によるが、その関心を大まかに分類すると、①近世中期の京都歌壇と川喜田家の交流、②近世後期の書肆との関係、③近世後期の蔵書家・愛書家同士の交流、④近世後期の京都歌壇との交流、といったことになろう。

① 9 代川喜田久太夫爾然斎、および 10 代久太夫潭空宛　183 点
② 城戸市右衛門 133 点、岡田屋嘉七 56 点
③ 小津桂窓 174 点、竹内弥左衛門 91 点、春木隼人 59 点、正住弘美 17 点
④ 高畠式部 22 点

これらは、2019 年 12 月時点で読み合わせによる確認作業をおこなっており、近い将来公刊の予定である。

また、上記の翻刻作業に合わせて、関連資料の調査もおこなった。主だったもののみ以下に記載する。

・川喜田石水『見たき本』（石水博物館蔵）の翻刻
・小津桂窓関連資料の調査・翻刻
・昭和女子大学桜山文庫所蔵の正住弘美書写資料の調査・翻刻

４．研究成果

上記３（１）～（４）の作業を通じて見えてきたのは、川喜田家および伊勢商人たちの文化活動の豊かさ、彼らを中心とする文化的ネットワークの広さと深さ、そして多様性が、当初の予想を遥かに上回っていたという点である。そして、本研究は、書簡解読を通じた文学・文化研究の有効性を確認するとともに、伊勢という視座から日本の近世文学・文化を捉え直す契機をも世にもたらしたと言える。

たとえば、天保から嘉永頃にかけての京都の書肆城戸市右衛門からの来簡が、関連文書を併せて 175 点、江戸の書肆岡田屋嘉七書簡が 65 点、大坂の書肆藤屋善七書簡が 16 点ある。これらの書簡の存在は、一つ一つの書肆の営業活動を十数年のスパンで追うことを可能にするだけでなく、三都の書肆の動向を互いに比較対照しながら、その大口顧客である川喜田家の蔵書形成過程を追うことも可能にする。さらに、それら書肆からの来簡を、同じ伊勢の蔵書家である小津桂窓からの来簡とも照らし合わせれば、川喜田家の蔵書形成が、書物をめぐる蔵書家同士

の積極的な情報交換を通じて能動的になされたことも見えてくる。つまり、川喜田家という"点"でも、同家と一つの書肆に限定された"線"でもなく、同家と三都の書肆、同家と他の蔵書家、そういった複数の人間関係とその変遷という、いわば"面"の広がりと時間の流れを併せ持った、これまでにない書物文化研究が可能になるのである。

また、書簡の差出人は、堂上歌人、和学者、漢学者、茶人、画師、書肆など、幅広い分野にわたり、地域も、京都・江戸・大坂の三都および伊勢全域に広がる。そもそも、近世の伊勢は江戸・京・大坂三都の文化と資本の交点にあり、さらに伊勢神宮という宗教的権威を背後に控えていた。そのため、この地域には文芸・学問・遊芸・宗教などのネットワークが縦横に交錯していた。そして、川喜田家のような江戸店持ち商人たちは、伊勢の局所的なネットワークに接続する一方、江戸や上方とも文化的、商業的関係を保つことで、三都をハブとする広域ネットワークとも接続していた。つまり、彼らは、伊勢の局所的ネットワークと、三都を含めた広域ネットワークとを中継する、いわばルーターのような役割を果たしていたのである（拙稿「伊勢の文化的ネットワークと『春雨物語』の流通――桜山文庫本の旧蔵者正住弘美をめぐって」、『雅俗』18 号、2019 年 7 月）。

こうしたネットワークこそが情報と書物の流通や蓄積をもたらし、本居宣長・荒木田久老といった文献学的手法を用いた学者や、小津桂窓・竹川竹斎といった蔵書家を育んでいったと考えられる。石水博物館所蔵書簡は、このように近世日本の中でも最も豊かな地域の一つであった伊勢における、多分野・多地域にまたがる人・モノ・情報のネットワークの様相を、具体的に浮き彫りにする重要な手掛かりとなり得る資料と言えるだろう。

実際、研究期間を通じて、近世中期の堂上歌壇と地下との関係、江戸画壇と伊勢商人の関係、伊勢御師の文化活動と伊勢商人との関係、近世後期の蔵書家・愛書家のネットワーク、伊勢商人の蔵書形成と三都の書肆との関係、幕末の公家社会と地方との関係などが、鮮明に浮かび上がってきた。 上田秋成『春雨物語』文化五年本の流通に関する書簡・関連資料に発見が相次いだことも特筆される。

従来、近世文学や近世文化は三都中心に考えられてきた。しかし、それを支えたのは川喜田家のような三都以外の富裕な商人たちではなかったか。本研究は、伊勢という新たな視座から、18 世紀から 19 世紀にかけての日本における、文化的・社会的なうねりを捉えてゆく契機となるはずである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 青山英正	４．巻 18
２．論文標題 伊勢の文化的ネットワークと『春雨物語』の流通――桜山文庫本の旧蔵者正住弘美をめぐって	５．発行年 2019年
３．雑誌名 雅俗	６．最初と最後の頁 4-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 神谷勝広	４．巻 177
２．論文標題 晩年の三代豊国――書簡に注目して	５．発行年 2019年
３．雑誌名 浮世絵芸術	６．最初と最後の頁 5-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 菱岡憲司	４．巻 7
２．論文標題 馬琴評答集の再検討	５．発行年 2018年
３．雑誌名 日本文学研究ジャーナル	６．最初と最後の頁 91-104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 青山英正	４．巻 26
２．論文標題 伊勢における『春雨物語』の貸借――石水博物館蔵川喜田遠里宛竹内弥左衛門書簡をめぐって	５．発行年 2018年
３．雑誌名 明星大学研究紀要　人文学部日本文化学科	６．最初と最後の頁 33-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 菱岡憲司	4．巻 34
2．論文標題 石水博物館所蔵・小津久足（桂窓）関連書簡について	5．発行年 2017年
3．雑誌名 鈴屋学会報	6．最初と最後の頁 55-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 早川由美	4．巻 45
2．論文標題 川喜田石水「見たき本」目録―近世期地方知識人の書物意識―	5．発行年 2018年
3．雑誌名 叙説	6．最初と最後の頁 79-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 早川由美
2．発表標題 川喜田潭空をめぐる嵯峨野文化圏 ―馬杉亨安等書簡と小沢蘆庵自筆六帖詠藻を手がかりに―
3．学会等名 東海近世文学会
4．発表年 2018年

1．発表者名 神谷勝広
2．発表標題 三代豊国の謎を解く―書簡という鍵―
3．学会等名 国際浮世学会（国際学会）
4．発表年 2018年

１．発表者名 青山英正
２．発表標題 伊勢の文化的ネットワークと『春雨物語』――石水博物館所蔵川喜多遠里宛竹内弥左衛門・正住弘美書簡をめぐって――
３．学会等名 「近世中後期上方文壇における人的交流と文芸生成の〈場〉」公開研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 早川由美
２．発表標題 川喜田石水「見たき本」から見る基礎教養としての書物と読書
３．学会等名 東海近世文学会12月例会
４．発表年 2016年

１．発表者名 青山英正
２．発表標題 高畠式部と川喜田石水――幕末の京都歌壇と伊勢商人
３．学会等名 第34回鈴屋学会大会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計4件

１．著者名 菱岡憲司・高倉一紀・浦野綾子	４．発行年 2020年
２．出版社 和泉書院	５．総ページ数 未定
３．書名 小津桂窓書簡集（仮）	

１．著者名 菱岡憲司,村上義明,吉田宰	４．発行年 2019年
２．出版社 雅俗の会	５．総ページ数 174
３．書名 小津久足資料集	

１．著者名 高倉一紀，菱岡憲司，龍泉寺由佳	４．発行年 2019年
２．出版社 皇學館大学研究開発推進センター神道研究所	５．総ページ数 101
３．書名 小津久足紀行集（四）	

１．著者名 青山英正・浦野綾子・神谷勝広・早川由美・菱岡憲司	４．発行年 2020年
２．出版社 明星大学	５．総ページ数 155
３．書名 「伊勢商人の文化的ネットワークの研究――石水博物館所蔵書簡資料をもとに」研究成果報告書	

〔産業財産権〕

〔その他〕

科研費調査報告展「伊勢商人川喜田家への手紙――数寄（好き）のつながり」、2020年2月22日～4月12日。

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	菱岡　憲司 (HISHIOKA Kenji) (10548720)	山口県立大学・国際文化学部・准教授 (25502)	
研究分担者	早川　由美 (HAYAKAWA Yumi) (30745310)	奈良女子大学・大学院人間文化研究科・博士研究員 (14602)	
研究分担者	浦野　綾子 (URANO Ayako) (30825774)	皇學館大学・研究開発推進センター・助教 (34101)	
研究分担者	神谷　勝広 (KAMIYA Katsuhiro) (40233952)	同志社大学・文学部・教授 (34310)	
研究分担者	高倉　一紀 (TAKAKURA Kazunori) (50278412)	皇學館大学・文学部・教授 (34101)	削除：平成29年3月7日
研究協力者	蔵前　克也 (KURAMAE Katsuya)	公益財団法人石水博物館・事務局長	
研究協力者	龍泉寺　由佳 (RYUSENJI Yuka)	公益財団法人石水博物館・学芸員	
研究協力者	桐田　貴史 (KIRITA Takashi)	公益財団法人石水博物館・学芸員	